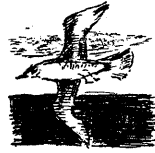


# 幼稚園と家庭をむすぶ



## 保育の実際と原理

宇田川照子

### 一、家庭から幼稚園へ——生活の変化と発展

入園を機会に、子どもは家庭とは異なった、幼稚園という環境にはいるのであるが、今まで育ってきた「家庭」とは、どんな世界であつたらうか、子どもは、家庭でどんな生活を過ごしてきたのであろうか、先ず、それを理解しよう。

○幼い子どもは、親に依存することなしに、一日も生活してゆけないのであって、子どもは家庭で、親に愛され要求を満たされ保護されて育ってきた。それゆえ、親と子は、愛情と信頼でかたく結ばれ、特に母と子は、一体感で深く結ばれている。

○一方、家庭は保護するばかりでなく、将来、独立した人間となる基礎を築くため、「しつけ」という形で、社会の要求を伝えてきた。

○家庭生活はまた、一つの社会生活で、両親・きょうだい・祖父母というような身分関係によって、支配・被支配の関係が存在しており、子どもは親に愛され保護されると共に、支配—服従という関係におかれ、その圧力をうけてきた。

子どもはこうした家庭生活を三年ないし五年送り、もはや家庭でなさるべき教育は一応なしとげ、今度は、家庭では、なしえない他の目的のために、幼稚園という集団生活にはいつてきたのである。

幼稚園は、肉親による結合体ではなく、他人の世界である。一日たりとも、離れて、生活できなかつた両親はおらず、その代り、導く者として、教師が現われたのである。そして、ここでは、同年令のたくさんの子どもたちとの集団生活がはじめられ、社会的人間へと成長するための教育がなされるのである。教師との上下関係はあるとしても、幼稚園での主な生活は同年令の友だちとの生活であ

り、仲間同志の生活である。

このような家庭生活から幼稚園生活への変化は、単なる変化以上の一大発展であり、子どもにとつては、一つの発達の必要であつて、子どもは、この変化に適応し、この発達の課題をなしとげなければならぬのである。教師は、子どもがこの発達の課題をなしとげ、うまく生活の変化に適応するよう助力しなければならぬ。

## 二、幼稚園と家庭をむすぶ保育の実際

以上の事を念頭において、家庭生活から幼稚園生活へ移行する入園期の保育を考えてみよう。

### I 入園期の保育の基礎

教師は先ず、次の事を考える必要がある。

1 環境の変化に直面した子どもは非常に大きな不安をもっている。

・親元をはなれた不安、

・家庭では、日々の行動は習慣的にできたが、幼稚園では、何一つ行動するにも、とまどつたり緊張したりする。身の振舞い方がわからない、

・はじめしてみる教師や友だちは、一体自分に何をするだろうか、など。

◎教師は、先ず、幼稚園での、もつとも基礎的な行動のし方(く

つ)のしまい、物の置場所、すわる場所、便所の在り場所など)

を知らせて、安心感を与えることが必要である。

2 今までの家庭生活が正常だった子どもでも、入園ということからは、喜びと共に緊張や不安をもたらすが、もし今までの家庭生活にまちがいがあったならば、もつと困難が生じるわけである。たとえば

・保護が強過ぎて環境の変化に非常に強い不安や恐怖をもつていて、幼稚園にはいることを拒んだり、親と離れず泣いたりする子、

・しつげが甘過ぎて非常にわがままで他人の中には、はいれない子、  
・しつげがきびしすぎて非常に委縮していて教師や友だちを恐れている子、  
・親に拒否され、愛情の不足で、攻撃性があり、友だちをいじめ

る子。

◎一人ひとりをよく観察し、一人ひとりの必要をしること、問題児を発見し個別指導をおこなうことが必要である。

3 間違つた家庭生活をさせていた家庭の両親や祖父母には、そのまちがいをしらせ、正しい家庭生活の中で、子どもを育てるようになさることが大切である。

◎母の会、参観日、講演会などをもつて、母親や祖父母に正しい子どもの教育のし方、幼稚園教育の目的などについて理解をもたせることが必要である。子どもだけの教育でなく、両親祖父

母教育もまた必要である。

## Ⅱ 入園期のたのしい遊び

入園期の保育の目標は、子どもに安定感をもたせ、たのしい遊びを経験させながら、集団生活のたのしさを知らせることであるが、参考までに、入園三日間に、どんな遊びをどんなふうに子どもに経験させたか、私のメモより記してみる。

### 一日目（年少組四才児47名 教師一名、助手一名）

○絵本、まり、ままごと道具、ぬいぐるみ人形、つみ木、クレヨンなど、自由につかって遊ぶ。

・子どもが好きなものを選んで遊びにはいれるように、いろいろな遊び道具を用意しておく。

### ○レコードで童謡をかけて遊ぶ。

・結んでひらいて、おてつないでなど、みんなの知っていそうな歌のレコードをかけ、いっしょにうたったり手をたたいたりして遊ぶ。

### ○部屋に集合して、童謡絵本でみんなの知っている歌をうたう。

・ピアノで最初からするより、家庭でも一冊や二冊必ずある童謡絵本をみて、うたいなれた歌をうたう方が、子どもに親しみやすいと思う。

### ○紙芝居をみる（ひよこのさんば）

・紙芝居は子どもが大好きである。みなから、中にてでくる動物の名前をいわせたり、鳴声のまねをさせたりする。最初は小さい声でしかいわないが、「もっと大きな声がでるでしょ」：と思う存分、声を出させる。緊張していた幼児の顔がほころび、初めて笑顔をみせ、ほっとしたような表情になる。

### ○年長組のゆうぎをみる。

・年長組のたのしそうな、ゆうぎをみせてもらう。最初はちょっとみせてもらうだけで、おゆうぎをするのは、明日のおたのしみにする。年長組の男児の荒々しい行動や、余り多人数だったりして、すわる場所がなかったりすると、新入の年少児は恐怖感をもってしまつて、あとになってゆうぎ室にはいることを嫌ったり、ゆうぎをしなくなったりするので気をつける。

### ○ママー人形のお話。

・部屋に飾ってあるママー人形やぬいぐるみ人形も動員して、子どもの前でお話をさせる。「今日は、誰れもあそんでくれないでつまらなかつたですよ、でもここで、みなさんのすることをみました。泣いている子はいないかな、みんなたのしくあそんでいるかな…って、明日は、あたしと遊んでくださいね、まってますから」などと。子どもたちは、不思議そうな顔をしながらも大喜び。帰りに、お人形にひとりひとりきょうならの挨拶をさせる。中には人形の頭を撫でたり、握手する子もでてくる。明日もまた幼稚園へこよう…という気持をもたせるのに役

立つようだ。

## 二日目

○庭で、砂遊びをしたり、かごめかごめ、ひらいたひらいた、いもむしごろごろ、汽車ごっこなどの集団遊びをする。

・手や身体のおふれ合う遊びは、友だちに親しみをもつのによいといわれる。

○かんとんなゆうぎをする。

・ゆうぎ室で知っているうたを歌ったり、前の日に年長組のゆうぎをみて、したくなった子どもだけ、結んでひらいてをレコードでしたり、二人で手をつないで歩いたり、チューリップやあひるになって遊ぶ。

○絵をかいたり、室内で自由に遊ぶ。

○人形芝居の人形の即興芝居をみたり、踊りをみる。

・子どもに親しみやすい動物―さるとか犬とかを登場させ、幼稚園生活を再現したような、しらすしらすに、幼稚園生活の楽しさが理解されるような即興しばいをしたり、歌に合わせて人形を踊らせたりする。人形しばいの人形の子どもを魅する力は、ほんとにおどろくほどである。

## 三日目

○庭の遊具で遊ぶ。

・遊具は年長組に占領されて、なかなか新入の年少組は期待してきたブランコやおすべりにのれないので、年長組が室内保育をしている時に、極力外に出し、思う存分、外の遊具で遊ばせる。

○桜の花の首かざりをつくって遊ぶ。

・教師が手伝いながら、馬かざりをつくりあげ、もってかえるようにする。

○絵をかいたり、本をみたり、まりなげしたり、外で遊んだり、集団遊びをしたり、自由にしたい遊びをする。

○人形の即興しばいをみる。

・子どもたちの要求に応じて、また、おさるのモンちゃんや、雀のチュン子を登場させ、簡単なおしばいや踊りをする。

(註) 新入の子どもは、自分から遊びはじめたりすることができず、どうしてよいかわからないで教師のあとにくっついて歩いたりする子が多い。教師やみんなといっしょに何かする方が、ひとりであるより安心感があるからである。そこで、朝の自由遊びは、少し早目に打ちきり、一度部屋に集まり、子どもたちに、するべきところにすわらせて安心させた上で、教師が中心となつていろいろな遊びを、次々と、経験させた方が効果的な場合がある。私は大勢の子どもを少ない教師で受けもって保育してきたのに特にその方が効果的だった。そのような考えで遊びを計画したことを、最後につけくわえておく。